
幻想的な大人の為の恋の絵本

江戸よもぎ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

幻想的な大人の為の恋の絵本

【Nコード】

N5987C

【作者名】

江戸よもぎ

【あらすじ】

あらゆる幻想を詰め込んだ恋の短編集です。辛い恋も美しい恋も、生きているからこそ。

震える吐息

黒い絹なんだと思う。

ベットカバーも、シーツも、枕も全て真っ黒で。ただそれに曖昧な価値を付け足したのは、彼女が、絹か否かの真贋など心底どうでも良いと感じる、独特な感覚の持ち主だからだ。

カーテンの無い……いや、余り意味の成さないレースのカーテンが掛かる窓から、星空と満月が見える。瞬きをした星は眠たそうで、白い部屋の、黒いベットに横たわる二人を見ていた。

「ねーえ」

フランススはベットの上の淫らな遊戯の後、いつもは頭の上で引つ詰めて垂らす、綺麗な白銀色の髪の毛の乱れを直もしないで相手を見た。

その相手はというと、返事はせずに視線をやり、彼女の青い瞳を見ながら喉を指で弄ってくる。

そのごつごつとした指で喉を擦られると、彼女は気持ち良さそうに喉を鳴らし、黒いシーツに引き立つ素肌を滑らせた。露になった局部を隠しめせず、軽く丸めた手で目を擦り頬を擦る。その仕種は、まんま猫のもの。彼女はいつものように、気まぐれに鳴く。

「ねーえ」

彼女は鋭い八重歯を覗かせながら、舌たらずの発音で再び視線を要求する。身体は完全に成熟しているのに少女のような、はたまた動

物のような癒しを兼ね備えていた。そしてフランスは二、三度瞬きしてから、相手の胸に手を付き、息が掛かるほどに相手の顔に自分の顔を近付けた。

「ワタシが死んだら、泣いてくれる？」

先程まで鳴きながら喘いでいた女とは思えぬ弱々しさで、彼女は瞳の色を強める。長い睫毛と切れ長の瞳の瞬きが増え、吐息は震えた。

「生きた証、くれる？」

その長く鋭利に尖った爪が、男の心臓部分に切れ目を入れた。ミミズ腫れのように赤くなつた五本の筋から、それぞれ玉のように出血する。だが男は眉一つ動かさず、ただ一言フランスに告げる。

ふんわりと広がった彼女の長い髪は男を優しく撫でる。そして、欲しい答えを与えられた彼女は、歓喜と悲しみに歪ませた笑顔を寄せて、一声か弱く鳴いてから、彼にたどしくも優しいキスをした。

「殺されるならアナタがいーの」

赤く小さくざらつく舌で、全身全霊の愛情を込めながら、彼女は愛しい相手の頬を舐めた。待つ先には決して幸せな未来ではない彼に、拙い表情でも愛の遊戯でも、美麗な称賛たる言葉でも伝えきれはしない想いを、思いながら必死で舐め回した。自らが付け足した傷も丁寧に従順に舐める。撫つたいと、月明かりの下で密に頬を染めた男に、一層に燃え上がる愛しさを感じながら。

「撫でて」

素肌を這う腕に、彼女は悲痛の叫びを漏らす。

「ぎゅってして」

幾本もの爪痕が立つ背中に、再び傷をつけて月に向かって鳴いた。鋭い脚の爪が、絹であろうシーツを引き裂く。そして白い部屋に写る黒いシルエットは変化を帯び始める。月が堕ちるのだ。フランススは金色の涙を流しながら喘ぎ、身体を反らしながら自らの在るべき姿に戻っていく。首筋に付けられた痣も、引っ搔かれた傷も、やがて覆われて消えゆく。

ちりん。

熱を保った、震える魂の吐息が排出された直後、そこにフランススの姿は何処にも無く……月夜の部屋の窓の下、真っ白なペルシャ猫が顔を洗っているだけだった。

「震える吐息」 f i n .

硝子の向こう

泡が煌めくのは、夢いから。

光の屈折で幾重にも広がる水の泡、水の揺らぎ。胎内を巡る水が勧ぶのは、還って来たからだ。幾千年、幾万年の時を経て、母の元へ。水面に手を伸ばせば、泡が浮き立つ。そして透ける皮膚。光も闇も、生命の一部なのだ。水の中にいることで、生きていると確信できる。自分は自由だ。衝動に縋りながら泳ぎ出そうとすると……制限が掛かる自らの尾鰭。激痛が走る。食い込んで擦れた鱗から、出血して水に溶ける。気泡は踊る。彼女の価値のある涙を纏って。

「イレエネ」

誰かが自分を呼ぶ声。

優しい。異形の種族を快樂で痛め付ける人間とは、違う声。

「イレエネ、平気……？」

叩いても音すら響かない、厚い硝子の向こうに居る貴方。

ごめんなさい。私、喉を切られたの。大好きな唄も歌えないのです。大好きな貴方の名前を呼ぶ事も出来ないのです。

何故こんなに、彼は泣きそうな顔をしているのだろう。彼女は、自分を見上げて硝子に付く青年の掌に、そっと指を這わす。すると彼の右手は、あの鉛玉を撃ち込む恐ろしい武器を持っていた。

「イレエネ、ごめん、俺は……」

何故、貴方は泣きそうな顔をしているの。

イレエネは微かに聞こえてくる、青年の言葉を必死で聞き取ろうとする。振動として伝わる、彼の優しい声を。

「頼むから」

彼は武器を床に捨て、水槽と彼女の尾鰭を繋ぐ足枷を見る。その瞳は潤んでいて、気泡のような不安定さで、今にも弾けてしまいそうだった。それでも光は降り注ぎ、少しでも寄り添おうと身じろぎした彼女の髪を、水はゆるく舞わせる。

「頼むから、そんな傷だらけで笑うなよ」

暗い、暗い部屋。イレエネの水槽にだけが光が射している。彼女から見た彼の姿は、ただ美しく輪郭が浮かび上がっていた。決して届かないと分かっていた。それでも愛しい、ただ一人の人。

腕の切り傷、胸の打撲傷。硝子の向こうで彼は静かに涙を流しながら、彼女の傷を指でなぞる。そして尾鰭や手首に嵌められた枷も全て、なぞる度に顔が悲痛に歪んでいくようだった。

「ごめんな。全部ぜんぶ、人間が悪い」

その言葉は小さすぎて、水の中に漂う彼女には届かない。彼女は彼の涙に、ほんの少し怒りの色が見えたように感じただけ。今度はイレエネが、硝子の内側から青年の輪郭を、ゆっくりと指でなぞる。

どれほど救われたか、分かるだろうか。この青年に初めて会った時、蹂躪され破壊された彼女の、軋んだ心の歯車が動き出したのを、彼はどれほど知っているだろうか。彼の優しさに、強さに救われた事を。

コポッ

特殊に発達した肺から、彼女は口と舌の形を上手く使い、顔を覆うほどの大きさの、泡の輪を作り出す。バブルリングと呼ばれる独特の空気の排出から生まれる、海に生きるもの特有の遊び。

青年は驚いた顔をし　きらきらと輝く宝石のような、あるいは天使の輪のような、まあるい気泡の輪を見つめた。魅入った彼の表情は儚くて、昇りゆく気泡よりも早く消えてしまいそうだと、彼女は思った。

イレ－ネはバブルリングに手を伸ばす。それは重い金属の手枷の上から、気泡の腕輪として光を与えた。

泣力ナイデ

唇の動きで、彼女は語る。硝子のこちら側と向こう側で合わさった掌に、感じるはずのない熱を感じながら。もう少し傍にいて欲しいと、密に願いながら。

泣かないで。貴方に逢えて、幸せだから。

彼女は知らない。光の加減と視力の悪さから、硝子の向こうに何があるのか、見えずにいたのだ。自分を見つめる彼の向こうの闇に、どんなものが存在するのか。彼女は知らない。人魚を見つめたままの青年に向けられる、沢山の銃口を。青年の背中から流れていく血液を。

この世に彼が生まれた事。そして、彼と巡り逢えた事。もしもまた巡り逢えるなら、母の元で。胎児として共に、揺られる事が出来るなら。触れる事が出来るなら。

「硝子の向こう」 f i n .

蜜のような

彼女に出会ったら、目を開けてはいけないよ。

それは深い深い、緑の中。

迷い込んできた旅人を喰らうという、蜘蛛がいた。それは艶やかな、淫らな女の姿をしていて、甘い蜜の誘惑で人を蠱惑させる恐ろしい魔女。そう、人は云う。

「ねえ、人を食べるって本当？」

少年の目の前に広がる巨大な蜘蛛の巣。木々に張り巡らされた銀の糸は、木漏れ日に反射して地平まで続く、森を境界とした芸術のようだ。

少年からは見えないが、それには所々、人間と思しき頭蓋骨や、太い大腿骨、あるいは脊椎が絡まり、揺れていた。それが重なり合い、風に吹かれる度に、寝床となった蜘蛛の巣が柔らかく揺れて、乾いた音をたてる。それは太い音、高い音、小さな音、それぞれが不規則に動き、風の指揮の下、協奏曲として楽譜の無い楽曲を奏でていた。

「喰らうよ」

そう言いながら頭上から、くると舞い降りて来た女がいる。それは一見曲芸のように逆さになったり、軀を捻ったり、宙返りをしたりするのだが、危なげながらも身軽に降りて来れるのは、彼女

の唇から雫を垂らしながら紡がれる、銀の糸のせいだ。それを器用に脚に絡めたりすることで、ゆっくりと、下へ降りる。結われた黒髪は、彼女が動く度に毛先で弧を描き出し、まるで踊るようにも見える。

女は枝から枝へと伝っていた一本の糸に脚の爪先で立つと、少年を見下ろした。

「あたしが恐ろしくないのかい、坊や」

金に輝く瞳で爛々と少年を睨み付けると、彼女は半裸の軀を翻し、髪を耳に掛ける。着物の帯や隙間から、刺の生えた異様な腕が数本這い出し、その恐ろしさを見せ付けるように蠢いた。すると、少年は声のする方へ顔を向けながら言った。

「僕、目が見えないから。」

女は一瞬驚いたような表情を見せたが、すぐにまた平静を取り戻す。それから、今度は糸を使わずに飛び降りる。すると薄い着物は風に舞い、新緑の匂いを撒き散らした。彼女は口から何かを勢い良く吐き出す。唾液を纏った何かは岩に当たり、苔の中に踞る。それは、白く輝く、骨であった。

が、この少年がそれを知るはずもない。彼は女の気配が突然真横に移動したことの方が、驚きだったのである。

「酷い傷だね」

魔女はくわえたキセルの火を燦らせながら、木々に映える少年の体を見た。

「ああ、殴られたりするからね」

「どうして笑って言えるんだい」

「さあ、どうしてかな」

木漏れ日の光はささやかなはずなのに、彼女は少年の顔を眩しそうに目を細めながら見遣る。それから肩に止まった小鳥に何かの肉片をやりながら、彼の腕の傷口を舐め上げた。すると、煙を上げながら一瞬で、膿の出ていた切り傷は癒しを得る。

「すごいね」

「魔女だからね」

痛みの波が消えたことを知った彼は、屈託の無い笑みを捧げる。そしてまた魔女は眩しそうに目を細め、長い睫毛を動かした。踵を返し、艶かしい素足は岩を踏む。女は言った。

「家にお帰り、坊や」

少年は笑った。

「帰る場所がないんだ」

歩みを止めて僅かに振り返る女の瞳は、燃え上がるような赤に変化する。そして俄かに、再びの驚愕の色が浮かぶ。口から放したキセルには、女の銀の糸が淫らに繋がっていた。

「どうして笑って言えるんだい」

「さあ、どうしてかな」

それでも浮かんだ笑みの隙間から、少年の頬を虹色の水が伝う。今までに無く小汚い服を着た、がりがりに痩せこけた訪問者。新緑は変わらずに、揺れている。風に混じるは死者の弔い。苔は深い緑で、駆けるは森の王。そして魔女は、半裸のままで、淫らなままで、少年を見た。蜜のような命が燃ゆる、小さな少年を。

「泣くのはおよし」

彼女は細く白い指で、長い歴史の中で初めて、獲物以外の人間に触れる。それは淡く煌めく、眩しい涙を掬うため。素足は転がった骨を踏み、小さな骨は埋まりながら、土へと還っていく。

そして、魔女は、長い爪でその痩せ細った腕を傷付けないよう優しく掴み、ゆっくりと歩き出した。二人の影はやがて新緑の彼方へ消えていく。この後少年がどうなったか、知る者はいない。

それは深い深い森。聴こえてくるは仄かな弔い、そして小さな、愛のうた。

「蜜のような」f i n .

満月の下で

それは、逆らえぬ時代の揺らぎ。

巨大な月は満ちながら落ちてくる。憐憫の情を携えるかのように連なる煉火は、遙か彼方まで続く。そして闇に聳えるは巨大な古い建造物。象牙のように純白な壁、瓦は闇に溶ける漆黒。朱色の印象は、窓枠に塗られた塗料。洗われるような透明な月下、風は少し、冷たい。

「音丸」

没落を迎えるばかりとなった男　鬼の王は城の最上階、その長い黒髪と黒衣の絹を風にはためかせ、額に生える二本の角を撫でながら名前を呼んだ。

間もなく屋根瓦の軋む音がし、一陣の風と共に背後に現れたのは、同じように黒い着物を纏う女だった。唇は月の光に於いても分かるような紫色をしていて、人形のような、堅さのある顔立ち。長い袖は仕事に差し支えるのであろう、籠手から覗く腕は肩まで袖を絞り上げている。男と同じように額からは角が生え、瞳は月のような金に輝いていた。

「この五百余年、おぬしも、よう尽くしてくれた」

王は月をその瞳に移しながら、掠れ気味の声色で、忍に告げる。すると彼女はそれに応えるように、地に額を擦り付ける恰好で、自らの意思を示す。

空には雲が、月に触れながら去ってゆく。その薄く拡がる空の水滴は、月を標として虹色の波紋を空に投げる。風は王の黒髪を解し、女の耳元で切り揃えた黒髪を撫でた。

暫く、二人の間にゆるりとした時が流れる。

罪無き異者を叩き潰すのは、人間の性なのだからしょうがない。

ふと、王は呟く。

左様でございます。

女は相槌を打つ。

その一言に籠められるのは、当人にしか理解し得ぬ一族の綻び。

これが数百年幾度となく培われてきた主従の関係。栄光の頂点に君臨していた男。そして彼に傳く、闇色の忍。油断するならば消えてしまふ、その煙の如く生きる者を捉えて離さないのは、栄光ではなく、支配でもないただ一つ、一族の誇り。闇に浮かぶ松明が辿り着けば、行く末は滅亡のみだと知りながら、鬼は誰として動かない。

「惜しむらくは、春の夜桜が見れぬことよの」

男は漆塗りの朱い手摺りに寄り掛かり、風格を失わぬままに笑い放った。身の丈よりも長い着物は、巻き上がる風に躍らされながらも最期の輝きを放っている。

春になればこの城の庭には見事な桜が咲き乱れる。そう、それは正に乱れながら咲き誇る。生命の喜びを廻る四季の唄に乗せ、風は吹き、天を仰ぎひたすらに。散りゆく情景は尊くも儚く、人を喰らう鬼の囃子に溶けて消えながらも、渦中に舞う躍動の鼓動を讃え、薄紅色の、桃色の花卉で舞いを飾る。

「……この音丸も、我が君の舞いを拝見出来ず、真に無念」

女は瞑った瞼の裏に、数百度見ようと飽きぬ華麗な舞踊を描きな

がら、床板に擦り付けた額の冷たさに意識を投じる。そうでもしなければ、身体が地面から離れてしまいそうだからだ。

女は主君の背中越して震える。

小さく唇を噛み締めて、感情という濁流の氾濫を堪えていることも決して、足元に存在し続ける自分を、知りながらも見ないこの御方は、やはり最後の最期まで、自分は憎めずに居る。呆れるほどに。僥んだ想いを無理矢理に閉じ込める為、音丸が甘んじて受けてきた道。心臓の檻を外すことはなく、それは終わろうとしている。

「今宵の満月は真に、美しい」

鬼の王は笑う。その叡智が下賤なる種族によって奪われようとも。月の美しさに心を密に高ぶらせ、ただそこに、存在を認める。それが繁栄の秘伝であると、誰が知り得ようか。そして時は来たる。

爛々と光る眼の向こうに、据えた覚悟を宿しながら。彼は月から視線を落とし、肩からずり落ち掛けた上着を掛け直してから、己の葛藤を全て払拭させる一言を放った。

「出陣せよ、鬼の民。我等が誇りを示して見せようぞ」

忍の瞳の焰が一際明るく燃え上がり、長らく主である鬼の、恐らく最期であるう命を確かに受け取る。そして、王と忍は、本来、自らの住み処である闇へ解けながら、その場に風を残して消える。終生を欲望の糧として散らすまいと、赴く為である。或いは、生きた証を刻む為に。

春が訪れ、やがて桜は見事に咲き乱れる。乱れ狂ったというには余りにも圧巻に。かつて栄え滅んだ鬼の一族の、生きた証を示して

いるかのように。

「満月の下で」fin.

鍵のない鳥籠

心の鍵を、開けてくれました。

紅色は、壁。あるいは天井や、床や、立方体のだっ広い部屋に置かれた紅い家具。テーブルは黒、長細いカウンターも黒、夜な夜な舞う、妖艶なる踊り子の檀上も、闇より深い黒。

そして、酒を酌み交わし、愛よ花よと夜毎開かれる、欲望が原色のままに開放される会場の中央に、彼女は存在する。

黒と紅の景色の中に堂々と吊り下がる鳥籠がある。

人が一人入れそうな鳥籠は真鍮の造りに淡く鈍い黄金色で、見るからに頑丈そうで、骨董のような飾り。それは捕らえる為ではなく、一種の装飾のようにも見えるのだが、すぐに、やはり所詮は籠なのだと確信させられる。つまるところ、その隙間から見える脚が。

鳥籠の中には、文字通りの鳥が居た。さらに述べるならば黄金の羽が肩甲骨から手首まで連なりながらも、もはや飛翔する力すら退化してしまった鳥が。この世で俗にいう、鳥人間である。黒いクツシヨンが散らばる中で、埋もれるように四肢を投げ出す彼女は、名をディティといった。

紅いペディキュアはまだ塗り立てで、動かす事も出来やしない。

それでも僅かな体重移動は鎖を伝わって、彼女の世界の全てである籠をぎしぎしと揺らす。

仰向けのままディティは籠に揺られ、暖色ながらもきらきらと輝く

照明に眼を細めながら、左手で真鍮の鍵を握り締めた。それは時を経た証として、曇って輝きを失ってしまったている鍵だ。少し大きめの、やはり骨董のような古めかしい飾り具合である。柄の部分には捻れ気味の装飾が施しており、握り部分には渦と穴が綺麗な模様を描く。通した穴から繋がっているのは、彼女の細首に掛けてある銀の鎖だ。

この鍵は彼女の自由を約束する、大切なものだ。だが、彼女が地に足を付けずにいる理由ではない。この鍵の錠はディティの鳥籠のものとは違う。そもそも、彼女の籠に鍵など掛けられていないのだ。

ペディキュアも乾いた頃、彼女は起き上がる。そして高級なクッションを蹴散らし、金の羽をたなびかせて、自分よりも遥か高い位置に存在する、もう一つの鳥籠を見上げた。ディティの瞳から気怠さが消える。

見据えた先には、紅いクッションに囲まれた青年が同じように見つめている。少女の軀に傷一つも無いのに比べ、青年の軀は無惨にも傷だらけで、真鍮棒を握る両手は火傷で爛れていた。

この世には未だ廃れぬ、鳥籠、という職業がある。

それは美しい見目の者が、自ら富豪や貴族と任意の契約を交わすもの。

商品となり、鳥籠の中で寵愛を受けながら丹念に美貌を磨き上げて鑑賞される。その挙動の一つ一つに人々は心を奪われ、どれだけ魅力があるかという価値で競う、上層ならではの下らない戯れであった。要は美術品と同じ扱いなのだ。それにはただ一つだけ、誰が決めたとも知らぬが決められた規則があった。

品物には主の許可無く触れぬ事。鳥籠たちは品物であるのだ。染める事は許されない。それは言葉ですらも。

巷で美貌を讃えられていたデイティは、それを破った。脚光を浴びすぎた彼女は傲慢で、恥を知らぬ少女に育っていた。自分に好意を抱く者は星の数ほど居たが、皆、罰則を恐れて何も仕掛けはしない。腑抜けばかりだと彼女は思っていた。

ある日、いつものように自分の足元を通り過ぎる人々。まるで、デイティの爪先を舐めて跪づいているような、己が頂点に君臨しているような感覚。履き違った悪戯心が起きる。それは純真などという無知の冤罪の上でも、抗いきれない罪。

そこにはちようど、毎夜毎夜、籠越して自分に魅入る青年がいた。騙されやすそうな、人の良さそうな顔をしている。少しからかつてやろう。そう軽く考えた彼女はその時、どれほど青年が自分を想い、恋焦がれていたのか知る由も無かった。

「わたしを、攫つて。」

彼女は揺れる鳥籠の隙間から、細く柔らかい手を青年に向けた。紅い唇は嘘の言葉ばかりを紡ぎ出し、黄金の鳥は降り立とうとする。

そして青年はその、差し出された小さな手を取ったのだ。すぐに逃げた二人は捕まり、青年の受ける仕打ちを瞳に焼き付けながら、デイティは己の軽率さと愚かさを、涙が涸れるまで恨み続けた。彼は庭を駆け抜けた足の腱を切断されて、歩けなくなった。彼女の声を聴いた左の鼓膜は破られた。彼女と話した舌は切られて、言葉を紡げなくなった。

自らの甘さが生んだ、恐ろしい仕打ち。その時、本当の意味を知った気がした。鳥籠は罪深い自分の為の牢獄なのだ、と。

「新しい遊戯をしよう」

泣き崩れる彼女の傍で、肥えた貴族が言い放つ。

「籠を二つ、天井に高いのと低いので吊すんだ。この鳥籠の少女が男の鳥籠の鍵を持ち、道具を使わずに助け出せたら」

彼女は、青年を見据える。毎夜の涙で酸化した真鍮の鍵を握り締め、届きはしない。道具が無ければどうしようもない。それでも、ディティは諦めない。謝らなければ。そして、伝えなくては。攫われたあの日に、自分は目覚める事が出来たのだから。

一番望むものを手に入れたら、青年の名を尋ねよう。瑠璃色の瞳でこちらを窺う青年と、金色の羽美しく舞わせる少女。古風な鳥籠で遊戯を続ける二人の若者は、紅と黒の海で、静かに見つめ合う。音の波に、欲の泡に吞まれても。金色の飛べない鳥は、今宵も飛ぶことを夢見る。

ディティの首には、彼女の自由を約束する大切な鍵が掛かっている。だがそれは、彼女の鳥籠の鍵ではない。そもそも、彼女の鳥籠に錠などないのだから。

「鍵のない鳥籠」 f i n .

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5987c/>

幻想的な大人の為の恋の絵本

2010年11月21日03時09分発行